

---

# 愛の墓標

滝龍太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛の墓標

### 【Nコード】

N9206I

### 【作者名】

滝龍太郎

### 【あらすじ】

別荘地の販売に携わっている吉行一馬には、久子という恋人がいる。

久子は広告代理店に勤めており、一馬の会社の広告を担当する事になった。

久子は、一馬の上司である前川課長の運転する車で、別荘地の下見に出

掛ける事になった。

そして、別荘地に着くと前川は自分の別荘に久子を連れて行き、

睡眠薬入りのコーヒーを久子に飲ませ・・・。

吉行一馬。大日本開発株式会社、本社新宿。その営業一課に勤める。同じ営業で三課の新井宏も同期入社である。

那須の別荘地の開発及び販売会社である大日本開発は、営業五課まであり、別荘地販売の実績は、首都圏では常に上位にランクされていた。

吉行一馬、新井宏、共に大学を出て社会人生活一年が経ち、二年目に入り更に意欲を燃やしていた。

今年も新卒者が十数名入社し、営業一課にも新人が二名入ってきた。

営業一課は、岸田課長はじめ岩下係長、大野主任がいて、営業員は吉行を入れて十二名。そして新人が二名入って来たので、総勢十七名の大所帯である。それが五課もあるので営業戦線は大変である。毎月、課別の売上競争があり、その他に個別ランキングが毎月発表されるのである。

吉行と新井は、新人の一年間を課の足を引っ張る事なく、ほっとしていた。

営業一課の受け持ち区域は、台東区、練馬区、中央区、新宿区そして都下であった。

その区域を個別訪問し、別荘地を売り歩くのである。

吉行の受け持ち区域は台東区で、先輩の中村と二人で一軒一軒回って来た。今年には新人の石川君が入り、三人で回る事になった。そして、四月から受け持ち区域が練馬区に変わった。

吉行には、大学二年の時に知り合った彼女がいる。名前を石渡久

子と言い、同じクラスで一緒に勉強をした仲間である。

「一馬」

久子が甘えた声で言った。

「うん？」

ベッドで一戦を終えた後、久子が一馬のタバコを取った。

「うちの会社ね、今度一馬の会社の広告を作るのよ」

久子は広告代理店に勤めている。

「へえー、久子の会社で？」

一馬が久子の手からタバコを取り、一服吸った。

「そうよ。それで私が担当になったの」

「本当かよ。じゃ、俺の会社へ来るんだ」

「ええ」

一馬の仕事は日曜日を書き入れ時なので、休みは週一回水曜日である。久子は土日が休みで、二人が会うのは火曜日の夜、一馬が久子のマンションに泊まりに来るのである。

お互い親元から離れ、一馬は五反田にいる兄弟夫婦の家に厄介になっ  
ている。久子は会社の借り上げ社宅にいる。借り上げ社宅といっ  
ても、練馬にある二DKの瀟洒なマンションである。そのマンショ  
ンへ、一馬は火曜日の夜にしょっちゅう泊まりに来るのである。

お互い、将来の約束はしてないが、いずれはそうなるのではない  
かと、二人ともそう感じている。

一馬の会社の広告を久子が担当する事になった。

久子も一年が経ち、ある程度は一人で仕事をこなす事が出来るよ  
うになっていた。

「別荘のチラシというのは、普通の分譲住宅と違って、絶対に必要  
というものではないので、購入後のメリットを最大限にアピールし  
なければならぬのです」

宣伝部の前川課長が、久子と久子の上司に説明をしている。

挨拶を兼ねて、一馬の会社へ打ち合わせに来たのである。

今日は上司と一緒にだが、次からは一人でやらなければならない。そんな思いを胸に秘め、久子は前川課長の話を真剣に聞いている。広告が命の仕事だけに、失敗は許されない。まして、一馬の仕事にも影響してしまう。

「明日にでも現地を見てもらいたいのですが」

前川が久子に言った。

「はい」

「現地を見て、購入意欲をそそるキャッチを考えてもらいたい」

前川は、久子の口元にあるホク口を見て喋っている。

「では、明日の十時に来て下さい。案内します」

「はい。わかりました」

久子たちは頭を下げ、大日本開発を出た。

## 2

一馬の仕事は、午後五時になると訪問を止めて会社に帰って来る。

そして、一日の訪問件数と内容を報告し、顧客との約束がなければ帰る事が出来る。

営業部は五課が一つの部屋にあり、だれがどこを受け持ち、成績はどうか一目でわかるようになっていた。

一馬は岸田課長に報告書を提出し、明日の予定を書いて、三課の新井を探した。

新井の受け持ち区域は板橋区なので、帰って来てもいい時間がないところをみると良い話が持ち上がっているのかも知れない。

一馬はそんな事を考えながら会社を出た。

時計を見るとまだ六時半なので、今日はいつも行く居酒屋には行かず、たまに行くスナックに寄ってみた。

新井と一緒にだと、必ずといっていいほど居酒屋に寄り、酒を飲みながら食事もすませてしまうのである。そして、たまにスナックへ

行くのである。

「あら、お久しぶり」

スナック『ジューン』のドアを開けると、リヨウコが一馬の腕を取った。

十九歳のリヨウコは一馬に惚れていて、一馬が来ると離れないで相手をしてくれる。一馬は、悪い気はしないが久子という恋人がいるので、手を出してはいない。

「吉行さんたら、たまにしか来てくれないんだから」

リヨウコが甘えた声を出し、一馬の隣に座った。

「忙しくてね」

「あら、そう？ 夜の十二時まで仕事をしてるの？」

リヨウコが皮肉った。

「そんな事はないけど」

一馬が水割りを口に運んだ。

「だれかさんとデートで忙しいんですよ」

以前、新井の口から一馬に彼女がいる事を喋られている。

「いや、そんな事はないよ。本当に忙しいんだ」

リヨウコはそんな事を聞こうとしない。

「だって、お宅の課長さんはしょっちゅう来てるわよ」

「だれ？」

一馬は気になった。

「前川課長さん」

「ああ、宣伝部は営業部と違って、そんなに忙しくないからね」

「ふーん」

リヨウコはそんなものかという顔をした。

「一人で来てるの？」

「一人の時もあれば女の人と一緒にの時もあるわ」

「二人で？」

「ええ」

リヨウコが怪しげな顔をした。

「一生懸命くどいていたわ」

「課長が？」

「そうよ」

一馬は、まさかと思った。

「どんな子？」

「可愛い子よ。確か・・・、浅田って言ってたわ」

(受付の子だ)

「最近来たのはいつ？」

「昨日よ。二人で来たわ」

知らなかった。前川課長が受付の子にちよっかいを出しているとは。しかも、会社の目と鼻の先にあるスナックでくどいているとは。

一馬は大胆だと思った。自分でさえ、久子と新宿では飲まない。どんな噂が立つかわからないからである。

それを、課長ともあるう人が、会社の近くで堂々と若い子をくどいている。

「どんな様子だった？」

「課長さんたら、しつこくくどいていたわ。浅田って子はいやがっていたけど、私から見ると満更でもなさそうに見えたわ」

「ふーん」

受付の浅田は一馬と同期で、高校卒業と同時に入社している。

(浅田さんはまだ十九か二十だな。それを四十面下げた課長が。しかしまてよ、確か浅田さんには彼氏がいたはずだ。そうだ宣伝部のやつだ。よく一緒に帰るところを見た時がある。別れてしまったのかな)

「何をぶつぶつ言ってるの」

リョウコが腕を絡ませて来た。

「いや、何でもないよ」

「浅田さんが心配なんですよ」

図星である。女の勘というのはおそろしい。

「何で俺が浅田さんを心配しなくちゃいけないんだ？」

「可愛いから」

確かに、受付に座るぐらいだから、スタイルは良く顔も可愛いかった。一度は、だれしも声を掛けたに違いない。彼氏の存在がなければ、一馬としてもちよっかいを出していたかも知れない。

しかし、同じ宣伝部の課長がちよっかいを出しているという事は、彼氏と別れてしまったに違いない。そうでなければ、前川課長としてもちよっかいは出さないだろう。

「ねえ、吉行さん」

リヨウコが、黙って考え事をしている一馬の脇腹をつねった。

「痛い！」

「何考えてるの？」

リヨウコが自分の水割りを一気に空けた。

「おい、大丈夫か？」

「知らない！」

リヨウコが冷たい目をした。

「怒るなよ。ちよつと考え事をしてたんだ」

「浅田さんの事でしょ？」

「違うよ。仕事の事だよ」

一馬はごまかした。

「まあ、いいわ。さあ、飲みましょ」

カチンと一馬のグラスに自分のグラスを当て、リヨウコは琥珀色の液体を喉に流し込んだ。

一馬は十時過ぎまでスナック『ジュン』にいたが、前川課長は来なかった。

3

久子は前川課長の運転する車で、東北自動車道を走っていた。

「石渡さんは、別荘の広告を作るのは初めてって言ってましたね」

「ええ、不動産関係はいろいろとやらせて頂きましたが、別荘は初めてです」

「まず、来てもらうという事は同じだと思いますから、よろしく頼みますよ」

新緑の東北道を、前川は恋人気分でウキウキしていた。

久子も仕事ではあるが、新緑の中を清々しい気分で望んでいた。

「課長さんはしょっちゅう来てるのですか？」

「ええ。仕事ですから」

久子は羨ましいと思った。

一馬から聞いている営業部の話では、朝から晩まで歩き通して大変なのを聞いている。

車は那須インターを出て、大日本開発の那須大日本ランドへ直行した。

入口には大きな管理棟があり、前川が管理人に久子を紹介した。

「この管理棟は皆様のコミュニケーションの場にも使う事が出来ません。もちろん、管理体制は万全です」

前川が別荘のPRをした。

管理棟の壁面には、大日本ランド全体の区割図が貼ってある。

「すごい数なんです」

「全部で三千五百あります。その隣にも、今造成しているのが約二千。それも終わればまたその隣をやります」

前川が、得意顔で喋った。

「凄いですね」

久子が感嘆した。

「では別荘地を案内しましょう」

前川が久子の背中を軽く押した。

車は広大な別荘地を走った。家が建っているものもあり、久子は目を輝かせた。

「家付きで売っているのもあるのですか？」

「ええ、ありますよ。建売別荘と言いまして、そりゃ見ればいっぱい

んで気に入りますよ」

「見てみたいわ」

「もちろんです。モデルハウスがありますから、そこへ行きましよう」

車は奥の方へ入って行った。とにかく広いので、どこをどう走っているのか、久子には見当がつかない。

「ほら、あれです」

前川が指をさした先には、いかにも別荘らしく夢のある建物が建っていた。

「わあ、素敵ね」

モデルハウスがこんな奥に建っているわけがない事を、久子は知らなかった。

前川は用意していた鍵で玄関を開け、中に入った。

「どうぞ。素晴らしいでしょう。モデルハウスなので全部揃っているですよ」

室内は、いつでも生活出来るように、全てが揃っていた。

「素敵だわ」

久子は、初めて別荘というものに入った。まるで夢の中のようにあった。

「まあ、座って下さい。今コーヒーを入れますから」

前川が台所に消えた。

久子は窓を開け、遠くの山を見て深呼吸した。

実は、この別荘は前川個人の物であった。女の子を誘っては、よくここへ来るのである。管理人には口止め料を渡しており、絶好の浮気場所であった。

もてるタイプではない前川は、女の子は別荘に弱いという心理を使い、それを誘い文句に度々利用しているのである。

今、まさに一馬の恋人である久子に、牙を立てようとしていた。

「さあ、座って」

景色に見とれていた久子を座らせ、前川がコーヒーを勧めた。

「疲れたでしょう。一服しましょう」

「いや、大丈夫です。この景色を見たら、疲れなんか飛んでしまします」

久子は、心からそう思った。

「そうでしょう。来て良かったでしょう。石渡さんもほしくなったんじゃないですか？」

「ええ。こんな気分、久しぶりです」

久子は、少し苦目のコーヒーを飲んだ。

「こんなに喜んで頂けるとは、きつと良い広告が出来ますね。期待してますよ」

「はい。ご期待に添えるよう、がんばります」

久子はコーヒーを飲み干し、再び窓の外を見た。

遠く山裾に霞がかかり、それを見ていると、目の前がブーツとして来た。

(久々に遠出をしたので疲れたんだわ)

久子は、ふらつきながらソファに腰掛けた。

「どうしました？」

前川が声を掛けた。

「ちよつと疲れたみたいです」

「朝早かったですからね。少し横になってなさい。毛布を持って来ますから」

「いや、大丈夫です」

と言ったが、久子は目眩がし、ソファに横になってしまった。

(どうしたのかしら、そんなに疲れているわけではないのに。変だわ)

久子の意識が遠のいて行った。

前川が毛布を持って、横になっている久子を見た。

「石渡さん」

声を掛けたが反応がない。

(案外早かったな)

前川は、ミニスカートから出ている形の良い足を見てゴクリと喉

を鳴らした。

4

リビングの隣の部屋にはダブルベッドが置いてあり、久子をベツドの上に運んだ。

スーツを脱がし、ブラウスを脱がした。そして、真っ白なブラジャーを取ると、ふくよかな胸が出て、ピンク色の突起物に前川は舌なめずりした。

久子は何も知らないでスヤスヤと寝息を立てている。

卑劣にも、前川がいつも使う手を、久子は罨にかかってしまったのである。

コーヒーに睡眠薬を入れ、寝入ったところで犯してしまう。ほとんどの子は犯している最中で目を覚めますが、その時はもう後のまつりである。犯してしまえばこっちのものと、又連れて来てやるからとうまく騙してしまう。

前川はしばらく乳房を見ていたが、スカートに手を伸ばし、ファスナーを降ろしホックを外した。形の良いお尻を持ち上げ、スカートを脱がした。そして、パンティストッキングに指を滑らせ、サイドテールからハサミを取り出しパンティストッキングを切り裂いた。

前川はパンティストッキングを脱がすのが苦手で、以前に脱がしている最中に目を覚まされた事があった。それ以来、サイドテールにハサミを入れて置き、パンティストッキングを切り裂くのであった。

おへその当たりから股の方に一直線に切り裂き、足の付け根からお尻の方へハサミで切り裂いて行く。後ろまで持って行けないので、今度はもう一方の足の付け根へハサミを移動した。

冷たいハサミが久子の内股に触れた。

「うっ」

久子が足を動かした。その拍子に、ハサミの先が久子の内股に突っ掛かった。

久子はビクツと痙攣し、血がうっすらと滲んだ。

「うっ」

久子が目を覚ました。

うっすらと目を開けると、天井が霞んで見えた。

（頭が痛い）

一度目を瞑り、手を胸の上に持って来た。

（裸だわ）

久子は、ハツとして体を起こした。

目の前に、ハサミを持ちニヤニヤした男がいた。

「何なの！ 何をしてるんですか？」

久子が大声を出した。

前川は、ただニヤニヤして黙っている。

「前川課長じゃないですか。一体何をしてるんですか？」

久子は我に返り、目の前にいるのが前川だとわかり、啞然としたがふと自分の下半身を見てびっくりした。

「キヤーツ」

下半身が露わだったのでシートで咄嗟に隠した。

久子はようやく状況がわかって来て、シートで隠した体に入手を入れてまさぐった。

パンティストッキングが切られている。ハツとして大事なところを触った。パンティは着けている。

（良かった。犯される前だわ）

久子が目を吊り上げた。

「いい加減にして下さい。こんな事をしていいと思ってるんですか」  
久子がそう言っても、前川は謝るところかふてぶてしい態度をとった。

「一回ぐらい抱かれたってどうって事ないだろう」

「冗談じゃないわよ」

久子は前川の態度を見て、もう敬語は使わなかった。

「なんで前川さんに抱かれなくちゃいけないの？」

あんたと言おうとしたが、まだそこまでは言えなかった。

「しょっちゅうだれかに抱かれてんだろ？ だったらいいじゃないか」

「ふざけないで、見損なつたわ」

久子が吐き捨てるように言った。

「そんな事、俺に言っただけいいのか？ 後で後悔したって知らないよ」

「何よ、脅迫するの。汚い人ね。そうやって何人もの人を騙したんでしょ」

「騙してなんかない。皆、喜んで抱かれたさ。往生際が悪いのは君だけだ」

「酷い人ね。訴えてやる」

「おいおい、自尊心を傷つけられたからって、そこまでするか？ だったら覚悟しておくんだね」

「そんな脅迫に乗らないわ」

「脅迫じゃない。君の将来を心配してるだけだ」

「そんなの心配してもらわなくても結構よ」

「きつい女だな」

「当たり前よ。こんな事されて、黙ってる今までの人とは違うからね」

「今度は俺を脅迫するのかね」

「当然だわ」

「だれも君の言う事なんか聞いてくれるわけがない。俺がそんな事をするなんてだれも信じないだろうね」

前川が自信ありげに言った。

「信じようが信じまいが、私は事実を言うまでだわ」

「本当にきつい女だ。世の中の事がまるでわかってない。君の上司もだめなやつだな」

「えっ、何なの」

「いや、何でもない」

(まさか、井上課長と話し合いが?)

そんな事はないと、久子は首を振った。

「帰らせて頂きます」

前川は観念したのか、久子の服をベッドの上に乗せ、部屋を出て行った。

久子は急いで着替え、

「一人で帰ります」

と言い残し、玄関を出た。

どこをどう来たかわからないが、何とか管理棟に辿り着き、タクシーを呼んでもらった。

まだ一時過ぎである。

駅に着いた久子は、会社に連絡した。

「石渡です。井上課長はおりますか?」

「ご苦労さま。課長は外出しています」

同僚の風見が出た。

「そうですね。また連絡します」

「何か言付けは?」

「いや、いいです」

久子は、真つすぐ会社に帰る気がしなかった。

(前川課長と話が出来ていれば、課長は何か言ってくるはずだわ。

何も聞いてないんだから、課長の知らない事だわ。それとも前川課長に頼まれて、断ったのかしら)

久子は、この事が脳裏に焼き付いて離れなかった。

(でも、そうだとすると、課長の進退問題に発展しかねない。こんなちっぽけな会社、この仕事を逃すとなると、私も危ないな)

久子は裏取引の実態を知った。

後はなるようにしかならないと考え、池袋でぶらっとして会社に帰った。

「お疲れさん」

井上課長がいた。

何の変わりのない課長の顔を見て、久子は言うのをためらった。

「どうだった？」

井上が在り来りの質問をしてきた。久子も通り一遍の話をした。

井上課長の態度を見つつ、久子は窺ったが、切り出すのを止めることにした。

（課長は何も知らないみたいだわ）

久子は探ってみようと思った。

「前川さんは、隅々まで良く説明してくれましたので助かりました」

「それは良かった」

井上は顔色一つ変えず、パンフレットを見ている。

「ところで課長」

「うん？」

井上が久子を見た。

「大日本開発の仕事は、課長が取ったのですか？」

久子は思い切って聞いてみた。

「いや、小山部長からの話だ」

久子はやっぱりと思った。

「何か？」

「いや、前川さんに失礼をしてはいけないと思って」

「君なら大丈夫だろう」

課長は何の心配もしていない。

（前川は小山部長に私の事を言ったんだわ。部長がまだ課長に言っ  
てなかったのかも知れない）

久子は様子を見る事にした。

（前川からか、部長からか、必ず何かあるはずだわ。それとも、課  
長を通じて来るかしら）

あの前川の事だから、近いうちに必ず何かを言ってくる、久子  
は思っている。

「ウチの仕事どう？」

一馬が久子に聞いた。

「ええ、何とかやってるわ」

二人は行きつけの居酒屋で落ち合った。

「那須の別荘地、見て来たわ」

「えっ、ほんと？ 凄かっただろう」

「ええ、綺麗な所ね。あんなにいっぱいあるとは思わなかったわ」

「そうなんだよ。他社に比べたら、問題にならないくらい大きいんだ」

「家は少なかったけど」

「うん。土地だけを買う人が多いんだ。家まではなかなか手が出なくてね。取り敢えず土地だけ買って、余裕が出来た時に建物を建てるんだ」

「ふーん」

久子は、こんな話はどうでもよかった。

本来は、広告の仕事で別荘地の内容を、一馬から聞かなければならない事が沢山あるのだが、今はそんな事はどうでもよかった。

それより、前川の正体を探り出さなければならなかった。

「前川課長と一緒に行ったのよ」

「前川課長と？」

一馬が意外な顔をした。

「二人で？」

「そうよ」

一馬が首を傾げた。

「どうしたの？」

「いや、宣伝部がやるのは当然だけど、課長自らが案内をするなんて意外だと思ったんだ」

「あら、そうなの。いつも課長さんが案内するんじゃないの？」

「うん。俺もよくわからないけど、前に広告代理店の人と宣伝部の人が那須に来ているのを見た事があって」

「その人、役付きじゃないのね」

「ああ」

「忙しかったんじゃないの」

「そうかな？」

一馬が、また首を傾げた。

「ところで、前川課長って、どんな人？」

「なんで？」

「いや、機嫌を損ねないようにしなければいけないので」

久子は、別荘での事は黙っていた。

「前川課長は社長の遠い親戚でね。いずれは役員になると思うけど、だから傲慢なんだと、久子は思った。

「人間的にはよくわからないが、ワンマンで強気だって聞いた事がある」

「そんな感じね」

「何かあったのか？」

一馬は久子の顔を見て、何かはわからないが気になってしまった。  
「ううん、何もないけど」

久子がウーロンハイに口を着けた。それを見て、一馬もチューハイをぐつと喉に流し込んだ。

「前川課長には気をつけた方がいい」

一馬がボソツと言った。

「えっ、何を？」

「手が早いつて有名だよ」

一馬は口から出まかせを言った。スナック『ジュン』のリョウウコから聞いた話を、勝手に解釈して喋った。

「ほんと？」

「ああ。くどいたりして来なかった？」

「ええ、何も」

一馬は心配している。

「紳士だったわ」

行くまではね、と口から出そうになった。

「ならいいけど。言葉に乗らないように」

一馬はあからさまに言わなかったが、心配してくれているのが久子にはわかった。

「大丈夫よ。私は平気」

久子は、一馬の心配が嬉しかった。

一馬の考えは二つあった。

前川課長自ら広告代理店の女の子を案内したのは、どうにかしてやろうという不純な気持と、もう一つは課長自ら今回の広告には力を入れているという事だった。

一馬は、リョウコから聞いた浅田順子との件がなければ、課長は今回の広告に力を入れているという事だけですまされるのだが、あの話を聞いた以上、久子を心配するのは恋人として当然の事である。

一馬は、宣伝部にいる人に聞いてみようと思った。

「行ってきます」

いつものように、一馬たちは会社を出て、あちこちへ散らばるのである。

「あつ、いけね。中村さん、先に行つててくれませんか。電話をするのをすっかり忘れてしまつて」

会社の玄関先で、一馬は先輩の中村に嘘をついた。

「お客か？」

「そうです」

「じゃ、先に行つてるから」

中村は何の疑いもなく、後輩を連れて会社を出た。

一馬は受付へ行き、内線で宣伝部の番号を押しした。

「営業の吉行です。岡内をお願いします」

一馬と仲の良い、岡内を呼んだ。

一馬は、岡内が出るまでの間、受付の浅田順子に見とれていた。

(前川課長とどこまで行ってるのかな)  
などと考えていた。

「岡内です」

「ああ、吉行だが。ちょっと話があるんだが、時間取れないか？」

「今か？」

「ああ」

「じゃ、応接室で待っていてくれ」

しばらくして岡内が来た。

岡内の話では、前川課長の評判は良く、浮いた話などは丸つきりないと云う。

今度的那須行きは、課長自ら行っていい広告を作るのだと張り切っているらしい。

一馬は、変に勘ぐられたくないので、営業からの要望を言い、前川課長の素行には一切触れなかった。

「ありがとう。お互いがんばろうな」

一馬は調子の良い事を言い、岡内と別れた。

(会社の中では品行方正にしてるけど、一歩外に出たら大変なやつだな)

リョウコの言った、浅田順子をくどきまくっていたという言葉が、一馬の耳から離れなかった。

6

久子は仕事が見つかなかった。

那須の広告を作らなければならぬのに、どこをどう書いたらいいものか、わからなくなっていた。

あの事件以来、前川からは何の連絡もない。

「石渡君、どうだね」

課長の井上が、久子の机を覗き込んで来た。

「ええ」

「なんだ、真つ白じゃないか」

井上が久子の顔を見た。

「ええ、何も浮かんで来なくて」

「那須まで言ったのに？」

「そうなんです。あまりに素晴らしかったので、在り来りじゃつまらないと思って」

久子は苦しい言い訳を言った。

「そうか、石渡君も二年目で、自分のものを出そうと思ってがんばってるんだな」

「いや、そんな大それたものじゃないですけど」

「わかった、わかった。でも、あまり時間がないから、速めに頼むよ」

そんなのではないのですと口から出かかったが、課長は良い取り方をしてくれたので久子は口をつぐんでしまった。

（前川から連絡が来てないんだわ）

久子は、前川が何を考えているのかわからなかった。

久子は、取り敢えず、在り来りの文句と大型開発の模様などを文字にして書いた。そして、一馬から貰ったパンフレットのキャッチフレーズを使い、形らしい物を作った。

一段落したところで、久子は頭をリフレッシュしようとして外に出た。四月の陽気は暖かく気持がいいが、風が強く歩くのがきつかった。公園にでも行つて気持を落ち着かそうと思つたが、強風の中を歩く気にならず近くの喫茶店に入った。

入口で女性週刊誌を手に取り、奥の席に座った。コーヒーを注文し、週刊誌を捲った。

その時、いらっしやいませと言う声に目をやると、小山部長が入つて来るところであつた。

（まずい）

こんな所でのんびりしている暇はないんじゃないかと言われるかも知れない、そう思い久子は立ちかけたが、小山部長の後ろに前川

ががいるのを見て、久子は慌てて週刊誌で顔を隠した。

小山は店内をキョロキョロしていたが、幸い奥の席はいつぱいで、窓際の席が空いていたのでそこに二人は腰掛けた。

久子は胸を撫で下ろした。そして、顔を週刊誌で隠しながら、上目使いで二人の方を見た。

小山が前川に頭を下げている。前川の後ろ姿が怒っているように見える。小山は久子の方に向いて、ペコペコと頭を下げている。

内容を聞きたいが、久子の場所からは遠すぎて聞こえない。

(きつと私の事を言ってるんだわ)

小山はひとしきり頭を下げて、喫茶店を出て行った。

前川はコーヒを飲み、携帯電話で話始めた。

久子はその後ろ姿を見ている。前川が出て行ってくれないと自分が出る事が出来ない。

前川は電話を切ると入口のところへ行き、ラックに入っている本を何冊か取り向き直った。

久子は咄嗟に顔を伏せた。前川は何も気づかず席に戻った。

(あぶない、あぶない)

久子はじつと前川の背中を見ていた。

そして、しばらくすると若くて綺麗な子が入って来て、前川の席に座った。

(あれはだれだろう？ 前川の餌食かな。あんな綺麗な子が?)

前川がそんなにもてるわけがない、久子はそう思っている。

前川と女の子が出て行ったのを確認し、久子は会社に戻った。戻ってみると、机の上に置いておいた那須の下書きがなくなっていた。

「課長が持つて行ったよ」

隣の風見が言った。

「何か言ってた？」

「いや、何も言っていなかったけど、自信作じゃないの？」

久子の不安な顔を見て、風見が聞いて来た。

「ええ」

久子はいまいいな返事をした。

しばらくして、井上課長が戻って来た。

「石渡君、ちよつと」

課長に、応接室へ呼ばれた。

「先日、那須に行った件だけど」

やっと来た。久子は待つてましたとばかりに、膝を出した。

「前川さんと二人で行ったんだよな」

「ええ、そうです。それが何か？」

久子はウキウキして来た。

「前川さんに何か失礼な事をした？」

井上が言いずらそうに聞いて来た。

「いいえ、何もそのような事はしていません」

久子はきつぱりと言った。

「何かあったのですか？」

久子は逆に聞いてみた。

「部長がおかんむりなんだ。社員教育がなつてないと言われたらしい」

「それはどういう意味ですか？ 私の態度がよくないとでも言われたのですか？」

「いや、そこまでは言っていないと思う」

「私が何をしたと言つのですか？ 前川さんからはつきり言つてもらいたいわ」

久子が強気に言った。

「まあまあ、待つてくれ。今回の仕事は部長が無理やり取つて来た仕事なんだ。ここで良い仕事をしてあげば、大日本開発の広告を一手に引き受ける事が出来るかも知れない。そうすれば部長は会社に対して鼻が一段と高く出来る。だから何としても成功させたいんじゃないかな」

「私だつてそんなのわかつています。今回の那須行きは私じゃなく、適任の人がいたのに、課長の選定がまずかつたんだわ」

「俺の選び違い？」

井上は、なぜ前川が那須へ行つたか理解をしていない。

「そう。だれとでもすぐに寝る子をね」

久子がニヤツと笑つた。

「まさか？」

井上は半信半疑である。

「そのまさかです。私の態度がどうだつたか、これでわかりましたでしょう？」

「・・・」

井上は、そういう事だつたとは気がつかなかつた。社員教育がなつてないと言われた時はカチンと来たが、教育の意味をはき違っていた。

井上は自分に怒りを覚えた。

「前川さんは恥をかいたわけか」

「冗談じゃないわ。恥をかいたのは私の方よ」

「そうだな。君の方が恥をかいたな。悪かつた、私の配慮が足らなくて。この通り、謝るよ」

井上はテーブルに両手を着けて頭を下げた。

「課長、頭を上げて下さい。課長が悪いわけじゃないのですから。

何も知らなかつた課長は、私にいい仕事をやりたいと選んでくれたのですから。逆に私は感謝しています」

「君にそう言ってもらつと助かるよ。今回の埋め合わせは必ずするから」

井上が、もう一度久子に頭を下げた。

緑は、社内でも有名な飛んでる子である。

そして、緑と前川が、那須へ下見に出掛けた。

「課長、適任者を選びましたね」

久子が井上に言うと、井上は片目を瞑ってみせた。

（これで一安心だね。前川のやつ、満足でしょう）

久子は胸の中で、緑に両手を合わせた。

「石渡さん」

隣の風見が呼んだ。

「新井さんという人から電話です」

久子は、新井という名前に聞き覚えがなかった。

「石渡です」

「新井です。以前、一馬と一緒に飲んだ事のある新井です」

「……、ああ、あの時の……」

久子が思い出した。

一度だけ一馬の同僚と飲んだ事があった。それが、同期でライブルの新井であった。

「実は、話があるのですが」

「私に？」

久子は不安になった。一馬が何かしたのかと思った。

「ええ。一馬の事でどうしても聞いてもらいたい事があるのです」

「どういった事ですか？」

「電話ではちよつと言いきにくい事なんです」

「そうですか」

「一馬には内緒でお会いしたい。今夜にでも」

久子は、一馬の事と言うので六時半に会う約束をした。

仕事の上で何かトラブルでもあったのか、久子はそんな心配をした。

久子は仕事を早めに終え、池袋のスナック『K』に来た。新井との約束の場所である。

ドアを開けると見覚えのある顔が久子を見て、

「新井です。突然お呼びたてしてすみません」

新井が礼儀正しく頭を下げた。

「こちらへどうぞ」

ボックス席が三つあり、一番奥の席に案内された。

「何にしますか？」

新井が飲み物を聞いてきた。一馬の友人という事と、非常に紳士的な態度なので、久子は心の扉を開けた。

「同じものでいいわ」

新井は高級なウイスキーを飲んでいた。

新井が器用な手つきで水割りを作った。

「さっ、どうぞ」

久子が一口飲んだ。

「濃かったら薄めますので」

「いや、大丈夫です」

少し濃かったが、高級ウイスキーのためか口当たりが良かった。

「以前にお会いした時、かなりいけると思いました」

新井が人懐っこく笑った。

「そうでした？ そんなに飲んだかしら」

久子はそんなにお酒は強くないが、一馬と一緒に飲んだ時は気持ちが緩んでしまうのか、かなり飲んでしまう。

「いつもこういう所で飲んでいるのですか？」

一馬の同僚には似つかわれない酒を飲んでいるので聞いてみた。

「いや、たまにです。私は彼女がいまませんのでお金を使うところがないもので、たまにこういう所でいい酒を飲むのが趣味なんです」

久子が疑問に思っていた事を新井が言った。

「一馬には石渡さんがいるからいいけど、私には酒ぐらいしかないので」

「そんな事はないでしょう。新井さんはもてすぎて選んでるんじゃないありません？」

「そうならいいんですけど、全然だめですね」

ハハハと、新井が屈託なく笑った。

口当たりがあまりにソフトなので、久子は飲むスピードが早くなつて、二杯目をおかわりした。

「美味しいでしょう。どんどんやって下さい」

新井は上手に久子をリードして行った。

「私事ばかりですみません。一馬の事で来てもらったのに」

「いいんですよ」

久子は新井の雰囲気飲まれてしまった。

「石渡さんもご存じのように、私と一馬は同期のライバル同士です」

「ええ、知ってるわ」

「お互いに、いつも競争をしています。私が勝ったり一馬が勝ったり、ほとんど互角です」

久子のグラスの中が減って来たので、新井がウイスキーを注いだ。そして、ミネラルウォーターを少なめに入れ、タンブラーでかき回した。

「これからも互角の戦いをして行くと思いますが、ご覧のように、私には恋人はおるかガールフレンドもおりません。それなのに一馬にはあなたのような美しい恋人がいる。それと……」

「それと？」

久子は何となく不安になった。

「まだ確信を得たわけではないので内緒ですが」

新井が口に指を一本立てた。

「だれにも言わない事を約束して下さい」

「はい」

久子はそう言わざるを得ない。

「一馬には、あなたの他に女がいるのです」

「えっ！」

久子の不安が的中したが、いざそう言われると気が動転した。

「どういう事です？」

「実は、恥ずかしい話、振られましてね」

「新井さんが？」

「ええ。ウチの会社に浅田という受付嬢がしまして、それとなくアタックしたのですが一向に乗って来ないので」

「……」

久子は酔いが回っていたが、真剣に聞いていた。

「思い余って、だれか付き合っている人がいるのか聞いてみたのです」

「そしたら？」

「ウチの会社の中にいるって言うんです」

「シヨックね」

「シヨックです」

「それで？」

「浅田さんはそれしか言ってくれなかったのですが、ある日、一馬とたまに行くスナックへ飲みに行ったんです」

「新宿？」

「ええ。会社の近くです」

「ふーん」

久子は、一馬がたまにでもスナックへ行くなんて知らなかった。

一緒に行った事はないし、いつも居酒屋で終わりである。

「他の友人と行ったんですが、そこで一馬の話題になって話していると、そのホステスが浅田さんの事を言うんです」

「ホステスが？ 浅田さんという人も行った事があるのね」

久子は酔っていたが、勘が働いた。

「そう。一馬がしきりに浅田さんの事を言ったらしいんだ」

「なんて？」

「あんな可愛い子に虫が付かなければいいなどと、心配しているらしい」

「ふーん。そのホステスが言うのね」

久子は、浅田という子より、そのホステスの方が気になった。

「そのホステス、名前は何て言うの？」  
「リヨウコと言う子だけど。まだ確かめてないので内緒だよ。ただ、一馬がそうだとしたら石渡さんが可哀想なので、耳に入れておこうと思っただけだから」  
「ええ、わかつているわ」  
「一馬一人がもてて、世の中不公平だよ」  
新井は、グラスに残っているウイスキーを一気に飲んだ。

8

いつもの居酒屋で、一馬は久子と待ち合わせをした。  
一馬がチューハイを半分飲んだところに、久子が来た。  
「ごめん、遅くなっちゃって」  
「忙しそうだね」  
「ええ」  
「何飲む？」  
「今日は他へ行きたいな」  
「他へ？」  
「そう。たまにはスナックにでも行きたいわ」  
久子は、一馬の行きつけのスナックへ行きかけた。  
「そうだな。いつも居酒屋じゃ飽きるよな」  
「そんな事はないけど。何となく行きたくなくなっちゃって」  
「わかった」  
一馬は残りのチューハイを一気に飲み干し席を立った。  
「どこがいいかな？」  
外に出て、一馬は辺りをキョロキョロした。  
「一馬が行ってる所がいいわ」  
「そんな所はないんだ。たまに新井と行く所はあるけど」  
（そこよ。そこに行きたい）  
久子は喉から出かかった。

「そう。新井さんとよく行くの？」

「いや、よくじゃないんだ。ほんとにたまにだよ。俺の給料じゃそんなにいけないのは久子がよく知ってるじゃないか」

一馬が弁解した。

そんなに弁解しなくてもいいのにと、久子は心の中で舌を出した。

「そうね。でも月に何回かは行くんでしょ？」

「う、うん」

「怪しいわ」

「怪しくなんかないってば」

一馬がむきになった。

「だって、私には一度も連れてってくれないじゃない。怪しいに決まってるわ」

「ごめん、ごめん。スナックに行くよりも早く二人きりになりたかったからなんだ」

(苦しい言い訳を言ってるわ)

「それで連れてってくれなかったわけ？」

「そうだよ。時間がもつたいたいじゃないか」

「上手いんだから」

一馬は照れている。

「じゃ、そのスナックへ連れてってくれる？」

「ああ、いいよ」

(やった。私には勝てないんだから)

久子が一馬の腕にすがった。

初めて一馬とスナックに行く。今まで一度もないのが、久子は不思議に思えた。

(早く二人きりになりたくてなんて言っただけど、ほんとかしら) スナック『ジュン』はそんなに遠くなかった。

「あら、吉行さん。いらっしやい」

ママさんらしい人が馴れ馴れしく言った。

久子は気まずい顔をして、一馬と一緒にカウンターに腰掛けた。

早いせいか、客の姿はなく、女の子もまだだれもない。

「ごめんなさい。まだだれもないのよ。もうすぐ来るから飲んでいて」

と言つて、棚からウイスキーを取り、ママが水割りを作り出した。

「こちらは？」

「同じものでいいわ」

「吉行さんはいつも濃いめですけど、あなたは？」

「ええ、私も濃いめをお願いします」

一馬のキープしてあるウイスキーは、さほど高級ではなかったので久子は薄めにしようと思つたが、ママがあまりにも一馬の事を知っているようなので、久子は濃いめの水割りを頼んだ。

（新井さんの言つた通りだわ。一馬は安い酒を飲んでいる）

久子は一安心した。

そんなに強くない一馬は、ほどほどに飲み歌い出した。

久子は一馬の歌を聞きながら、濃いめの水割りを飲んでいた。

（新井さんもここに来た時は、一馬と同じウイスキーを飲むのかしら）

久子は、高級なウイスキーを飲んでいた新井からは想像出来なかつた。

一馬の歌が終わり、替わりに久子がステージに行き歌っていた。

そこへ、若い女の子が二人奥から出て来た。

「あら、いらつしゃい」

「一人？」

「違うわよ、ほら」

二人が久子を見た。

「彼女？」

リョウコが聞いて来た。

「まあね」

「にくらしい」

リョウコが一馬を睨んだ。

「怖い顔だな」

「だって」

リヨウコが顔をプイと横にし、久子の方を見た。

「ねえ、ボックスに行きましょよ」

もう一人がウイスキーと氷を持って、ボックス席に移った。

一馬はグラスを持ち、その後に従った。そして、一馬のすぐ横にリヨウコがくつついて座った。一馬はお尻を少しずらした。

「ずらさなくてもいいでしょ。いつもならくつついてるのに」

リヨウコが怒った顔をした。

一馬は黙っている。

「吉行さんて意地悪ね。わざわざ彼女を連れて来なくてもいいじゃない」

もう一人が言った。

「いや、彼女が来たいと言うので」

一馬がリヨウコの顔を見た。

リヨウコは黙ってタンブラーを回している。

そこへ、歌い終わった久子が戻って来た。

「あら、こっちに移ったのね」

「いらっしやい、上手ですね」

「ほんと、上手かったわ」

二人がお世辞を言った。

「ありがとう」

久子は素直に受け止めた。

リヨウコは席を立てて久子に席を譲り、久子はわざとらしく一馬にくつついて座った。

「ねえ、何を話してたの？」

「いや、別に」

一馬はしきりに水割りを口に運んでいる。

「吉行さんたら隠してたのよ」

「何を？」

「こんな素敵な人がいる事を」

「別に隠してなんかいないよ。ただ言わなかったただけだよ」  
女三人に囲まれて、一馬はたじたじだった。

久子は、新井が言っていた女はどっちか探していた。当然、一馬の隣に座っていた女がそうだと思っただが、よくはわからない。しかし、こういう時は口数が少ない方がそうだと思ひ、やっぱり隣に座っていた女がそうだとわかった。

久子は口数の少ないリヨウコを見て、よけい一馬にくつついた。

「あまり楽しくないみたいね」

一馬の耳元で久子が囁いた。

「そんな事はないよ」

目の前でリヨウコが一馬を睨んでいる。久子はその顔を見て、一馬と出来ている感じがした。

「吉行さん、歌わない？」

リヨウコが二人を離そうとしている。

「ねえ、デュエットしましょうよ」

しつこく離そうとする

「いつもデュエットしてるの？」

久子が一馬に聞いた。

「いや、たまにだけ」

「うそー、いつもしてるくせに」

リヨウコがわざと言った。

「やらしい」

「なんでやらしいんだよ。ただ歌うだけなのに」

「くつついてでしょ？」

「そうよ、べたべたくつついて来るんだから」

リヨウコが言う。

一馬は立つ瀬がなかった。久子には責められるし、リヨウコにはこの時とばかりに言われている。

「わかった、わかったから。二人とももう終わり。一人で歌って来

る」

一馬はそう言ってステージの方へ行ってしまった。

重い沈黙が久子とリヨウコの間に残った。一馬の歌声が聞こえるが、二人の耳には入らなかった。

「おいおい、どうしたんだよ」

いつの間にか、一馬は歌を終え席に戻って来た。

「二人とも、よそよそしくしないで、酒がまずくなるぞ」

「なによ。私という人がいながら、このリヨウコさんと出来てるんでしょ」

久子は言うまいと思っていたのだが、一馬のノーテンキな顔を見てついに言ってしまった。

「まさか、そんな事はないよ。俺と出来ているわけがないだろう。」

彼女に悪いよ」

「別に悪くなんかないわ」

リヨウコが口を尖らした。

「私と吉行さんが出来てるか出来てないか、それは二人だけの秘密よ」

「おいおい、そんな言い方は止めてくれよ。それじゃまるで出来てみたいじゃないか」

一馬は慌てた。

「ほーら、出来てるって言うてるようなもんじゃない」

「違うよ。本当の事を言ってよ」

一馬がリヨウコに哀願した。

「吉行さんがそこまで言うのなら言うてあげる」

リヨウコはもう許してあげようと思った。私がいる所に彼女を連れて来るなんて許せないと思っていたが、あまり苦しめても可哀想な気がした。

「ほんとは何も無いの。吉行さんにはあなたがいるから、私がちょっとかい出しても知らん顔よ。残念でした」

リヨウコが一馬に舌を出した。

「ふーん」

久子はあまり信じてはいなかった。

一馬は水割りをぐいぐいあおっている。

久子の顔を見ると、信じていない様子がありありとわかった。信じようと信じまいと、指一本触っていない一馬は、好きにしてくれという気持であった。

9

「おはよー」

受付の浅田順子に一馬が挨拶した。

「おはようございます」

浅田順子が丁寧にお辞儀をした。

(どうせ勘ぐられるならこの子にしてほしいよな)

一馬はそんな事を考えながら営業室に入った。

昨日は飲み過ぎたせいか頭が痛い。

今日は十時にお客様の家へ行く事になっていた。場所は新宿である。

訪問が終わり、時計を見ると十時四十分であった。

ちよつと早いが昼食を摂ってしまおうと、一馬はいつも行く居酒屋へ向かった。十一時から昼の定食をやっており、たまのデスクワークの時、利用していた。

十一時という時間はまだ早いせいか、ぽつぽつしか客はいなかった。

一馬はカウンターに座りメニューを見ていた。

「いらっしやませ」

店員が大きな声を出した。

一馬が横目で入口の方を見ると、浅田順子が入って来た。

こんな時間なのにどうしたんだろう、受付は十一時から昼休みなのかな、そんな事はないなどと考えていると、浅田順子がカウンタ

ーを通り越し、テーブル席に着いた。

(だれか来るのかな?)

一馬は興味いっぱいであった。この時間に女の子のはずがないから、きつと男に違いないと思った。

幸い、一馬には気づいてない。一馬は横目でチラチラ様子を見ていた。

「いらつしゃいませ」

(来たかな)

一馬は入口の方を見た。

(うっ、前川課長だ)

一馬は一瞬、顔を背けた。

前川は一馬に気が着かず、浅田順子の前に座った。

(リヨウコの言ってた事は本当だったんだ。昼前の十一時に二人で昼食を摂るなんて、完全に怪しい)

だれもいない所で、二人きりの食事が出る。ところが、ここで見ている人がいるのにと、一馬はまたチラチラと横目で様子を探った。

二人の笑い声が聞こえ、まるで親子みたいな感じである。ところが、仮面の下には若い女の体を弄ぶ、獣のような顔があるのだ。

一馬が舌打ちした。

食事が終わり、二人はいそいそと出て行った。まだ十一時二十分である。

(急いで食べてどこへ行くのかな)

一馬は後を尾けてみようと思った。

会社とは逆方向に二人は歩いて行く。この先はホテル街である。

一馬は心臓がドキドキした。

一馬が尾けているとも知らず、二人はホテル街に入り、一軒の入口に消えた。

(やっぱり出来てたんだ)

前にリヨウコに聞いた時はくどいている最中だったのに、まった

く手が早いなど一馬は思った。

新井が惚れていたのに、残念だな、と一馬が呟いた。

10

いい天気であった。

今日は、お客を別荘へ案内する約束をしていた。

一馬はベッドから跳び起きた。

昨日、久子から聞いた話が頭に引つ掛かっていた。ウチの広告担当を降りたという事である。

あの前川が直接の担当をしているので、何かがあったのだと一馬は直感した。

久子は理由は言わなかったが、前川と何かあったに違いないと思っっている。

表向きは品行方正の課長面をし、裏ではこれぞと思う女に手を出す。

(久子はいいい女だから、前川のやつ手を出したんじゃないかな。気の強い久子の事だから、頼に一発お見舞いしたかも)

フッフと一馬が笑った。

一馬は九時にお客の家を出発し、首都高速から東北自動車道に入った。

「吉行さん、わざわざ遠くまですみませんね」

「いえ、これも仕事ですから。新緑的那須高原をご覧に入れます」

一馬はご機嫌であった。

別荘地の販売は、ほとんどが現地近くの駅で待ち合わせなのだが、たまに自宅から送り迎えというのがある。

一馬はこつちの方が好きだった。現地へ着くまでの間、お客とコミュニケーションがとれるからである。

購入意欲が半々の場合、このコミュニケーションの威力は絶大なものがある。

別荘を持つ意義を一通り説明し、冗談を言い合つとちょうど那須インターになるのである。

一馬はインターを出て大日本ランドに入り、管理棟で一休みした。他の営業も何組か案内をしていた。

一服した後、一馬はお薦め物件を案内した。

中はとても広いので、車で案内をする。

大日本ランド内を、車で移動しながら見せるのである。

奥の方に前川課長の別荘がある。一馬はその手前の方の物件を案内し、前川課長の別荘をチラッと見た。

別荘の前に車が停まっており、たまたまだれかが降りるところだった。

(前川課長だ)

日曜日なので家族と来たのかなと思って見ていると、助手席からミニスカートを履いた子が降りて来た。

遠目だが不釣り合いなその格好は、前川の娘ではないと直感した。(浅田順子かな? でもちよつと派手過ぎるな)

一馬は顔がはっきりと見えなかったたので、だれだかわからなかった。

一馬はランド内を一周し、管理棟に戻った。

一馬はお客を一休みさせ、その間に会社へ電話を入れた。

「大日本開発でございます」

聞き慣れた浅田順子の声が聞こえた。

「ん?」

一馬は戸惑った。

「吉行ですけど、浅田さん?」

「ええ。お疲れさまです」

「そつだよな。日曜日はいつも出てるよな」

「.....」

一馬は課長を呼んでもらい、現状を報告した。

一馬の頭の中は複雑であった。浅田順子は会社にいる。あそこに

いる子は娘でない事は一目でわかる。

(一体、だれなんだ)

一馬は確かめてみようと思つて、お客に適当な言い訳を言い前川の別荘へ向かつた。

一馬は別荘の手前で車を降り、別荘の裏手へ回つた。

柵はなく、何本かの木が境を形成していた。

一馬は裏側から表に回ろうとしたが崖になつていて回る事が出来なかつた。

一馬は辺たりをキョロキョロし、崖を登つた。さほど高くはないので簡単に登れたが、前の尾行といい、人の家を覗く事といい、一馬の心臓は張り裂けそうだった。

一馬は木の間から顔を出し、中の様子を伺つた。幸い窓が開いていて、若い女の声が聞こえた。

「前川さんたら上手なんだから」

聞いた事のない声である。はつきりとした通る声をしていた。

前川の声はボソボソと小さい声で、ほとんど聞き取れない。

「石渡さんもここに連れて来たんでしょ」

(ん！ 久子の事だ。久子を知っている)

「あの子はだめよ。ちゃんとした彼氏がいるみたいだから」

カチャカチャと氷をかき回す音が聞こえた。

(久子の事や久子が来た事まで知ってるんだから同じ会社の人かな。そうか、久子の後釜かも知れないな)

急に静かになつた。

(どうしたんだらう。何をしてるのかな)

一馬は変な想像をした。

しばらくして、女が窓の側へ来た。

一馬は咄嗟に身を隠し、女の顔を見た。

まあまあ美人である。浅田順子に比べればかなり落ちるけど。

一馬は勝手にランク付けした。

一馬の推測が当たった。  
ベッドの中で、久子から前川の事を聞いた。  
久子もリヨウコの事をもう一度確かめ、お互いもやもやしていた  
ものが取れた。

久子の社内旅行の写真を見せてもらい、別荘にいた女は鹿沼緑と  
わかった。

「緑ならやりかねないわ」

「彼氏はいないの？」

「特定の人はいないらしいけど、かなり遊んでるって噂よ」

久子は一馬から緑の事を聞き、別荘での出来事を思い出した。

「あー、嫌だ」

「そんなに迫って来たの？」

「卑劣よ」

久子は怒りをあらわにした。

「でもかわしたんだろ？」

「もちろんですよ。もうちよつとで危なかったけど」

「もうちよつとで？」

一馬が心配した。

「どんなふうによ？」

久子は躊躇したが、喋ってしまった。

「睡眠薬よ」

「えっ！」

一馬はびっくりした。

「睡眠薬で眠らしてか？」

「そうよ」

「それは卑怯だな。よく久子は気が着いたな」

「危なかったわ」

「そうか、良かった」

一馬はほつとした。

「睡眠薬でなんて許せると思う？ 絶対に許せないわ」

久子は高ぶる感情を抑えられないでいる。

「俺だつて許せない。とんでもないやつだ。皆そんな手を使つてるのかな？」

「かなり使つてると思つわ。簡単だもん」

「そうだよな。しかし、これは犯罪だぞ」

浅田順子にもそうしたのかも知れない。もちろん、別荘にいた鹿沼縁にも。

一馬は許せなかった。あの別荘を買つた目的はそのためなのかも知れない。それに、日曜日に堂々と別荘に女の子を連れ込んだという事は、別荘の事を家族に内緒にしているのかも知れない。休みの日なんだから、家族がいきなり遊びに来る事だつて考えられる。その心配がないから白昼堂々と。

考えを巡らしていると、一馬の気持はよけい苛立つて来た。

「久子、お前のかたきを取つてやるよ」

「ほんと？」

一馬にはいい案が浮かんでいた。久子のかたきと浅田順子を取られた悔しさで、一馬はやつてやると自分に言い利かせた。

12

一馬は、休みの日、杉並にある前川課長の家へ行った。

一馬の休みはウィークデイであり、宣伝部の休みは日曜日なので前川は会社にいる。それは確認済みである。

「ごめんください」

一馬は、ごく普通に訪問した。

「はい、どちらさまでしょうか」

奥様らしい声が聞こえた。

「突然、失礼致します。私は大日本開発の者でして、那須の別荘を

紹介しております」

「ああ、大日本開発。ウチも大日本開発へ勤めておりますわ」  
優しい声が返って来た。

たまにこういう事もある。あらゆる家に訪問するのだから、いち社員の住所は覚えていないから有り得る事である。

でも、今日は違う。わざと知らぬつもりで来たのである。

「そうですか。前川さんというと、宣伝部の前川課長のお宅ですか？」

「ええ、そうです」

「それは失礼致しました。前川課長にはいつもお世話になっております」

別に世話になんかなくてないが、何とか口実を作っておじゃましないといけないのである。

「すみませんが、トイレを貸して頂けないでしょうか」

「ええ、どうぞ」

一馬は玄関を開けてもらい、トイレを借りた。別にトイレに行きたかったわけではないが、中で一、二分時間をつぶし、出て来た。

「ありがとうございます」

「大変ね。営業の人って。さっ、お茶をどうぞ」

そう言われ、応接間に通された。

奥さんは優しい顔をしていた。

一馬は、お茶を飲みながら雑談をした。そして、頃合いを計り切り出した。

「ところで、大日本ランドへはしょっちゅう行くのですか？」

「えっ？」

奥さんは訳のわからない顔をした。

「どこへですか？」

「我が社の大日本ランドですよ。確か、先週の日曜日も、課長は奥さんを連れていらしてたでしょう。奥様もご一緒でしたか？」

「娘が？」

奥さんが狼狽している。

一馬はしめたと思った。

「先週の日曜日は、私と娘は新宿のデパートへ買い物に行つてましたけど」

「失礼ですが、お嬢様はおいくつで？」

「まだ高校生です」

一馬は、わざと考えるふりをした。

「おかしいですね」

「主人がだれかと一緒に、大日本ランドへ行つたと言つたのですね」

「ええ。先週の日曜日に、私はお客様を連れて大日本ランドへ行つたのですが、その時課長を見かけたのです」

「先週は仕事だと言つてましたから、お客様じゃないかしら」

奥さんは平静を装っている。

「そうかも知れませんか」

一馬はお茶を一口飲んだ。

「でも、自分の別荘を案内したのですかね？」

一馬が、かまを掛けた。

「自分の？」

「ええ。課長の立派な別荘」

「別荘？」

奥さんが困惑した顔をした。

「ウチは別荘など持つてないです」

「えっ！」

一馬は、わざとらしくびっくりして、自分の口を押さえた。

「何なの？ その別荘って」

「いや、あの、その……」

わざとまごついて見せた。

「吉行さんつて言つたわね。ちゃんと答えて頂戴」  
乗つて来た。

「奥様は知らなかつたんですか？」

「何を？」

「喋ってしまいますけど、課長には絶対内緒ですよ」

「わかったわ」

優しい顔が、段々と険しくなってきた。

「じゃ、聞きますけど。別荘を持っている事はご存じないのですかね？」

「知らないわ」

「じゃ、遊びにも行った事がないのですね？」

「ええ、一度もないわ」

「じゃ、お嬢さんも？」

「ないでしょうね」

「じゃ、先日いたのは？」

「だれでしょうね」

奥さんの目が吊り上がって来た。成功である。一馬は心の中でやっと思った。

前川課長は、大日本ランドの一番奥に別荘を購入しており、しょっちゅう女の人を連れて来ている。同僚も目撃しているが、お嬢さんと思いい何の不審も湧かなかったと、一馬が話した。

奥さんはブルブルと震え出してきた。

「いいですか、今言った事は絶対に内緒ですよ」

「ええ……」

このままでは全てを課長にぶちまけそうなので、一馬は、奥さんと結託する話を持ちかけた。

翌日、前川課長の奥さんから、偽名で一馬に連絡が来た。

「今度の日曜日にも仕事だつて言ってるわ」

一馬の言う通りに奥さんは従っている。

一馬は、日曜日に会社を休み、課長の奥さんを大日本ランドへ連れて行く約束をした。久子も一緒である。

車中で、久子の口から前川の悪事を直に聞いた奥さんは、顔を真っ赤にし、謝りっぱなしであった。

車は那須インターを出て、大日本ランドへ入った。管理棟へ寄らず、駐車場を一瞥し、課長の車がないのを確認してランド内の一番奥へ車を進めた。

一馬は車をゆっくりと走らせ、ランド内の景色を奥さんに見せた。当然、そんなものは目に入らず、目の吊り上がりが一層激しくなっていた。

「あれです」

前川の別荘が見える位置に来た時、一馬が前方に指をさした。その別荘の前の駐車場に、見慣れた車が停まっている。

「来てるな」

一馬が車を見て言った。

「だれと一緒にかしら」

久子が言った。

「また騙して連れて来たんだわ」

ずっと黙っていた奥さんが、夫の車を見て吐き捨てるように言った。

奥さんと久子が車から降りた。

そして、二人並んで玄関の前に立った。

ピンポン。中でチャイムの音が聞こえた。

しばらくして、玄関が静かに開いた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9206i/>

---

愛の墓標

2010年10月8日12時09分発行